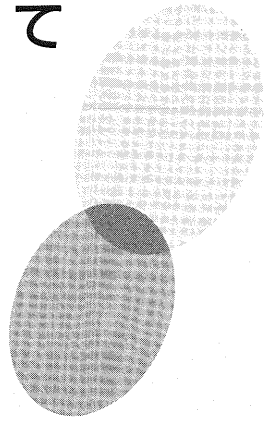


〈特集〉 卒業によせて

# 新しい春を前にして



宮里 暁美

子どもたちへ寄せる思い

園庭の霜柱が溶け、日差しが柔らかくなる頃、幼稚園は「しゅっぱつ」の準備で忙しくなります。幼稚園生活を終え、新しい生活へと「しゅっぱつ」する準備です。

修了に向けていろいろなことに取り組みながらも

「今」という時を惜しむようにして、子どもたちは遊びます。

砂場で大きな山をつくっている子どもたちがいます。砂を積み上げ形を整え固めていきます。トンネルを掘り、そこからうねうねと続く道をつくっていく子どもたちの手は、まるで熟練した技術者のようです。

鬼ごっこが始まりました。次々に仲間が増え、子どもたちだけで遊びを進めています。左右に分かれて陣地をつくり、互いに守っている宝を奪い合うという鬼ごっこです。

子どもたちの目が鋭くなり、素早い動きで宝へと近づいていきます。守る動きと攻める動きがぶつかり合い、二人の子どもが転びました。

「大丈夫！」と思い、走り寄ろうとしたその時、転んだ二人は何事も無かったかのように笑顔で立ち上がり、また遊び始めました。

走り寄ろうとした動きを止め、子どもたちを見つめる私の胸に、たくさんの思いが浮かんできました。子どもたちと過ごした日々をたどりながら、『あの子も、この子も、本当に大きくなった』という、うれしい思いに包まれます。

そして、またゆっくり自分の中に浮かんでくる思いがあります。子どもの「今」にその都度向かい合

いながら、悩んだり喜んだりした日々を思い起こし、あの時の自分はせっかちではなかったか、あのかかわりは不適當ではなかったかという思いです。子どもに謝りたいという思いも浮かんできます。

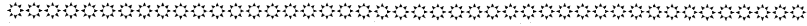
そしてもう一度、輝く笑顔で遊んでいる子どもたちの姿を見つめ、過去にさかのぼり、それを訂正しようとしている自分の小ささを恥じる気持ちになります。

子どもたちは、「今」を生きています。この喜びの中に、素直に立ち合うことが、今、保育者としてできる精一杯のことなのでしょう。

子どもたちは、いつも今という時を、ただひたすらに生きていますから。

お茶を味わう・花を贈るという行為を通して

以前勤務していた園では、三月三日にお茶会を開いていました。



いつもは積み木や巧技台を組み立てて遊んでいる遊戯室に、畳が敷き詰められ、琴の音が響いています。雛人形も飾られている部屋に、十数人ずつ順番に入り、お茶をいただきます。



すっかり様変わりした遊戯室に足を踏み入れるだけで、子どもたちの背筋がすっと伸びてきます。和服を着たお茶の先生が、静かなしぐさでお茶を点てています。それを正座した子どもたちがじっと見えています。

「はい、どうぞ」と差し出されたお茶を、子どもたちはいただいていきます。

大きなお茶碗を両手で包むようにして持ちあげ、妙な顔で口をつけます。柔らかく泡だった抹茶は、少し苦い。その苦さは、初めての体験として、子どもたちの中に拡がっていきます。

お手伝いのお母さん方がお茶碗を下げにきます。畳に両手をつけておじぎをします。

何もかも初めての体験という子どもがほとんどかもしれないお茶会でした。修了を間近に控えた子どもと一緒に並んでお茶をいただきながら、静かで豊かな時間の中に成長を感じさせるものがある、と感じました。

幼稚園で種から育てた桜草の鉢を、お世話になった近隣の方に届けにいくという取り組みもしています。

小さな花をつけた桜草の鉢を持って、数人の子ともと園長先生が近隣の家を訪ねていきます。

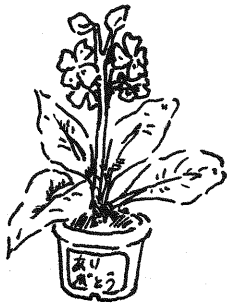
子どもたちに月見団子の作り方を教えてくださったおばあちゃん、コマ回しを教えてくださいましたおじいちゃんなど、幼稚園の生活の中に、たくさんの方との出会いや、かわりがあったことを改めて感じ

ます。

「幼稚園で育てた桜草です」「いつもありがとうございます」  
「ございました」など、子どもたちの言葉を、優しい笑顔で受けとめてくださいます。

桜草と一緒に修了式の招待状を届けると「もうすぐ一年生なの。うれしいでしょう！ がんばってね」「修了式は必ず行きますよ」と声をかけてくれます。

花を届けた帰り道「よかったね」「喜んでくれたね」「修了式を見に来てくれるって言ってたね。みんなにも教えなくちゃ」と弾んだように子どもたちは話しています。うれしい気持ちに包まれています。



子どもたちは、幼稚園でたくさんの人とかかわり、優しさをいただき大きくなりました。そのことを実感し、感謝の気持ちをあらわすことに、「ありがとうの桜草」がつながつていると思います。

### 子どもたちへ伝えたいこと

修了式の中で証書を受け取る前に、子どもたちが一人ひとりと、楽しかったことやがんばったことなど心に残っていることを話すと、いう取り組みをしたことがあります。

三月、自分は何を話すのかを考えるように投げかけると、子どもたちは自分が考えたことを言葉にしていきました。

「なわとびが跳べるようになったことがうれしかった」「積み木で遊ぶのが好きだった」「劇で大きい声でセリフを言って、ドキドキしたけどうれしかった」など、言葉は一人ひとり違います。「やっ

ぱり〇〇にしようかな」と、話すたびに内容が変わる子もいました。どの子も「自分は何を言おうか」と一生懸命考えていました。

修了式の練習が始まると、すっかり言えるだろうかと不安になる子どもの姿も見られ、私は、子どもの後に立ちながら、言葉を思い出せるように助けたり、大丈夫だよと声にならないメッセージを送り続けたりしました。

子どもたちの姿を見つめながら、「自分のひとことと言うことの意味は何だろう」と考えました。修了式が間近に迫ったある夜、私は学級通信にその思いを綴ることにしました。

修了式の中で言うひとことを、自分で考えたね。

楽しかったこと、がんばったこと、うれしかったこと、さくら組さんに伝えたいこと。自

分は何を言おうかなと、すっかり考えて決めたんだよね。

自分には言えないひとことがある。うれしかったのも、悲しかったのも、自分なんだから。『自分』が大切だと、先生は思っています。練習で、言葉が言えなくなって、泣きそうになつた友達がいたね。

その子のひとは、その子にしか言えないから、誰も替わってあげられない。

「だいじょうぶかな」。そう思いながら、じーっと見ていたね。心で応援していたね。

がんばって、ようやく言ったひとは、とっても小さい声だった。だけど、一生懸命言ったひとことだった。ほっとして、そのあと、思わず拍手をした。「よくやった！」と声をかけた人もいた。うれしいなって、先生は思った。『友達』がいるっていうことは、本当

